CHAIN　JUDGMENT

杉崎　ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＣＨＡＩＮ　ＪＵＤＧＭＥＮＴ

【Ｎコード】
Ｎ７７３１Ｙ

【作者名】
杉崎　ゆう

【あらすじ】
シスター服の女。カテナ・ハーンに急に襲われた、悲しい吸血鬼、サングレイス。
カテナの好奇心旺盛、唯我独尊に巻き込まれ。　前途多難な主人公サングレイス。　彼の安息は、来るのだろうか？
遺跡調査が趣味で、お宝大好きなヒロインこと、カテナが送るファンタジー世界をお楽しみください。　あ！グレイその大鎌に触っちゃ大変なことに・・・・・　それでは本編スタート

出会い

服装は、袖とスカートの長いシスター服。　そして体中に鎖を巻いた格好。　手には、身の丈と大差ない大きな十字架のような剣。
女がそこにいた。　髪は、腰まで長く一本にまとめた金髪。　目は、空のように透き通った蒼色。　そんな女が、なぜ？　サングレイスを襲うのかサングレイス本人は、全く理解不能であった。

強い・・・　こいつ人間か！　全く歯が立たない。　隙も見せず、淡々と俺に攻撃してくる。
「お前は何だ。　いったいこの館に何しにきた！　意加減しろよ、俺はお前なんかに恨みを買う覚えもないし、初対面の筈だぜ！」
「そんな細かいことは気にしない気にしない！　伝説級の吸血鬼がいるって町の人に聞いてさぁ～　これは、一目見なきゃと思って態々この雪山まできたの。　序に、私が貴方こと、審判を下してあげるわ～」

なんだ、神様気取りか？　たちが悪いぜ！この女。
「俺は、のんびり家で本を読んでるのが好きなんだが？　大体内の親は、留守中だ！　いい加減帰れ」

現在、館に暮らしているのは、長男。　サングレイス一人であった。　父と母、ついでに妹は、ただいま旅行中で、留守にしている。
一週間は、帰って来ない。

「それに只今仲間（助手）を探してます。　最近遺跡調査が、大変で・・・　ここらで、良い仲間を探そうかと」
「悪いが、遺跡調査なんかに興味は無い。　態々ご足労だったたなシスター。　きっと何時か良い仲間は、見つかるさ。」

会話をしながら、淡々と死闘を繰り広げ、苛立ちを隠せないでいる吸血鬼。　いい加減殺すかと考えたその時、女の鎖から強い魔力を放ち始め。　鎖がサングレイスを襲った。

「そろそろ斬り合いも疲れたし、これで決めるね！」

襲ってくる鎖を素手で叩き衝けても物ともせず。　霧化して、逃れようとしたが鎖には、効かず。　捕まってしまった。

「なんだこの鎖！　どうなっているんだ。　力が全く入らない？・・・」

「捕まえた。　それでは、審判を下します。　チェーンジャッジメント」

女がそう叫んだ瞬間。　サングレイスを巻きつけてる鎖が蒼い光を放ち。　サングレイスに衝撃を与え。　サングレイス意識を飛ばした。

災難は続く

気絶した、サングレイスを見ながらカテナは、満足したような面持ちで見ていた。
「想像以上に力があるね！　しかも審判は、吸血鬼を選んだ。これは見っけもんね。」

『ＣＨＡＩＮ　ＪＵＤＧＭＥＮＴ』は、魔力を込めながら、念じれば鎖が審判を下してくれる。　今回念じた内容は、カテナのパートナーであるかの問いだった。　審判は、サングレイスを選んだ。
しかも、超が付くほどの審判だった。　幸先の良いスタートを歩み始めていた。

「早速、契約の指輪でもはめよ」

そそくさとカテナは、指輪をはめて、呪文を唱え始めた。
「我、汝の命の灯火が終わるまで、永遠に歩むことを誓う。　我、カテナ・ハーンが命ずる」

呪文を唱え終えた瞬間。　指輪が光り出し、お互いの手の甲にルーン文字が刻まれた。

「ふ～　これで終わった。　少し疲れたし、君の家で休ませて貰うよ！」

サングレイスを鎖で空中に浮かせながら運び。　カテナは、館に向かった。　館に着いたら、鎖に念じながらサングレイスの部屋を探し、ベットに寝かせた。
そのあとカテナは、館の中にある書物を読み漁り、久しぶりの入

浴を満喫した。

「吸血鬼は、本当に水が苦手なのね。　まさか紅茶のお風呂に入れるなんて夢にも思わなかった。」

カテナは、お風呂を鎖(ダウジング)の要領で探し、見事お風呂を発見した。しかし、シャワーにしても、湯船にしても純粋な水は、一切出なかった。　しかしカテナ自身、そんなに違和感無く入れてた。

風呂も満喫し、圧しく袋の中身をダイニングで整理していたら、サングレイスが起きてきた。

「人の家でお店を広げるな。　何だこの早々たる品は？」

「へっへ～　私の遺跡発掘により、手に入れた宝物よ。　言っとくけど、あげないわよ。　絶対に！」

そんな会話をしながら、長刀を抱えながらカテナの背後に近づき、一太刀浴びせようと切り掛かったが、長刀の刃が近づく境にカテナが命令をした。

「ストップ！」

「ちっ」

「あまいあまい。　君を手名づけようとする輩だよ。　少なくとも君と同程度の力が無きゃ勤まらないよ」

「は～ぁ・・・　分かったよ。　家の家訓道理。俺は、素直に従いますよ。」

サングレイスの家名。　シルバー家は、己を打ち負かすことがあれば、そやつを殺すか？もしくは、生涯一生忠義を尽くす決まりであった。　それは、男女年齢は問わず。　その家で生まれた者、全

員に化せられた家訓であった。
「俺の名前は、サングレイス・シルバー。　あんたの殺るか、忠義を尽くすか、俺が見定める。　俺を幻滅させるなよ。」
「いいよ別に？　そんなに怯えなくても・・・　私が可愛がってあげるから。」
「ふっ　言ってろ」
「でわでわ。　私の名前は、カテナ・ハーン。　カテナでいいわよ。　グレイ！」
お互い自己紹介が終わり。　グレイが今後の事を考えながら紅茶を飲んで、いまだに宝物を整理しているカテナに聞いた。
「いつ出るんだ」
「明日には、出発する予定。　ここら変の近くにある古代人の神殿に行く予定。」
「それってもしかして・・・・　ホワイトドラゴンを祀ってる竜人族の里の事か？」
「そうそう。　話が早くて助かるわ。」
「そう簡単に見つかるかな？　不安が過ぎるのだが・・・」
「大丈夫よ。　何とかなるって！　実際遺跡調査、発掘なんて危険がいっぱい出し。　貴方の家に来るのも人間の私には、十分辛い道なんだから。　いまさら危険の一つや二つ気にしてたら、切りが無いわ」
「それもそうか。」
カテナ本人が気にするならともかく、グレイ本人が気にしてもしようがないと思い。　カテナのお宝を眺めてた。

金銀財宝に、不陰気のよろしくない壷や鏡。　剣や矛などが沢山あるのであった。　そんな品々を眺めていたら、一際目立つ変わった武器見つけた。　徐に近づき、グレイは、手に取ってしまった。

「でかい鎌だな。　初めて見たよ俺。　小説で読んだことがあるぞ・・たしか・・・死神が魂を狩るときに使われる物と書いてあったな。」

「えっ　なに？　なんか言った？　ってえええええ　グレイ！それに（大鎌）触ったら。」

カテナが慌ててそれを静止するもすでに遅し。　グレイは、完璧に握り。　素振りをしているのであった。

「別に取りはしないよ。　大体カテナは、命令すれば俺は、逆らえないだろ。」

そんな悠長な態度でいたグレイ。　そしたら、黒い影が大鎌から出てきて、グレイの体を包みこんだ。　そんな姿を眺めながら、カテナは、合掌し哀れみの視線でグレイ見ていた。　３０秒ぐらいだろうか、黒い影がグレイか晴れたのは。　驚愕だったのだろう。グレイは、目をぱちくりさせ。　カテナの哀れみの視線を感じ、声をかけた。

「どж☆Шんｃよ！」

あれ声がうまく出ない。　どうしてだ？　なにが起こった？

そんな思考をめぐらしてる最中にカテナが思い口を開いた。

「今は、一言も喋らずに落ち着いて聞いて。　グレイが持ってるその大鎌の名前は、虚構の大鎌。　その能力は、持ち主の性別を事実と異なる変化を与える能力。　別名、神の悪戯」

説明を聞き終えるやいなや、グレイは、大鎌を投げ捨て、姿見に直行した。　グレイの部屋に姿見などは、無く。　妹の部屋に来ている。　そして見たことも無い女が青い顔してそこにいた。身長１４０ｃｍ　小柄で、銀色の床ギリギリのロングヘアー。　目は、血のように紅に輝いていた。

現実を直視した後、光の速度でカテナに抱きつき涙ながらにシスター服を引っ張っり、声が出てないのに口をパクパクさせて、縋り付くのであった。

「グレイ！　ちょっちょっと落ち着いて。　命令で喋らないようにしてるから、なにを言ってるのか分からないから。　まあ言いたい事は、何となく分かるけどさ・・・」

「［なんなだこれ！　早く戻せこら！　マジで簡便してください・・　ずっとこのままなんて絶対にやだ。　何とかしてくれ。］」

「元に戻す方法は、天界に行って。　ふざけた製作者を見つけないと無理だわ。　その呪いは、死神が作ったのだから。」

しばらくそんな話題の押し問答をやった後、落ち着いたのか、落ち込んだのか、グレイが椅子に座り、涙を出し尽くしたのか、明後日の方向を向きながら佇んでいたのであった。　このままじゃ話が進まない、いや話ができないのでカテナは、グレイに優しく頭をなでながら話した。

「今のままだとうまく声でなくて、喉を駄目にすると想ったから、命令で声を出さなくしたから、命令を解除するね。　ゆっくり声を喉からだしな。」

カテナの思いやりが伝わったのか、ゆっくり頷き。　言う通りに

声を出した。
「あ・・・あー。こんな・・かんじでいいか？」
「良いよ。　そんな感じ。　男から、女はでは、出し方が違うから。　なれてないうちは、ゆっくり喋りな。」

グレイにとって災難が起こってしまい自分の身体に慣れるのに一週間。　つまり7日も費やしてしまった。　7日も経てば色々と理解した。　まず着るもの。　これは、以前着てた服が全くサイズが合わない・・しかも、男物を頑なに拒んだカテナの命令で着るようにし。　今では、羞恥心無くなった。　初日は、それでも辛かった。
しかし今では、なんとか着れたのであった。

後は、お風呂の入り方などを重点的に仕込まれたのであった。
特に五月蝿かったのが髪の毛の洗い方であった。　そんな荒い方なら洗わないほうがきれだなど、綺麗な髪は、大事にしなさいなどかなり五月蝿い。

吸血鬼の能力は、男の時と同じ能力が発揮できた。　霧化・再生・吸血・狼化・そして飛行。　中でも飛行速度は、男の時よりも速く動けて、驚いた。　これは、ちょっと嬉しかったりして。

そして、便利アイテムも入手できた。　そう・・この身体の原因。
大鎌である。　なんと必要な時に念じれば、直ぐに手に届く。
そして必要ないと念じたり。　手から離したら、消えるのであった。
しかも切れ味が抜群。　正直切れないものは無いのではと想うぐらい素晴らしい出来だ。　正直あの呪いさえなければ、純粋にほしいと想ったね。

暫くそんな生活をしていたら、ある日突然玄関の扉を開き。　帰ってきたのであった。

「ただいま～　お兄ちゃん！　帰ってきたよ～」

そんな妹の声を聞きながらなんて説明をするか考えるグレイであった。

本人以外は、別に問題ない。

和やかな視線で、息子。　今は、娘になった自分たちの愛の結晶を見つめ。　暢気な会話し始めた。

「母さんやい。　グレイが暫く見ない間に可愛くなってしまたなぁ～　私は、誇らしいよぉ実に。」

「そうねぇ貴方。　まさか、あの引きこもりで、根暗なグレイがここまで可愛くなるなんてぇ。　私に似て綺麗だし、申し分ない娘だわ。　早く嫁の貰い手でも探して、結婚でもさせようかしら。」

親の発言に納得ができないでいる、グレイ。　尤もグレイが男だろうが女だろうが、問題は、そこでは、無かった。　親は、グレイに早く結婚してもらい、親の跡を継いで、立派になって欲しいのであった。　そんな状況に苛立ちを隠せないグレイは・・・

「父さん。お母さん。　俺がこうなった原因とか聞かない訳。しかも俺がグレイだって、最初から分かってたみたいだし・・・父さんの力なら何とかできないの？」

「そのままで、良いではないか？　男でも女でも私たちは、お前の家族だぞ。　胸を張って生きろ。」

想像道理で、大して気にしては、いないのであった。　そんなことより。　グレイの隣にいる人間の女。　カテナのことが気になっていたので、娘（息子）の話を適当に切り上げて、カテナに質問した。

「しかし・・良く息子に契約が出来ましたね。　正直驚いていますよ。　グレイは、決して弱くないはずですよ。」

「そうですね。　息子さんは、弱く無いけど、考えが甘いですね。今迄強敵と廻り会わなかったとお見受けします。　そのお陰かな

んとか勝てました。」
「そんなご謙遜をなさらずとも。　息子が油断していたと言え。
それは、グレイ本人の未熟。　自分で何とかするでしょ。　したがって、我々は、貴方に危害は加えないと約束します。　それに・・・」
「グレイお姉ちゃんだ～　小さい頃から両方欲しいと想ってたの。
カテナさん。　ありがとうございます。　夢が叶いました。」
「ふふ。　そんな御礼を言われることは、してないわ。　それに貴方のお姉さん（お兄さん）が自分から進んで、なったのだから。
私何も。」
「そっか。　お姉ちゃん。　私の為にありがとう。　これからは、気兼ねなく一緒にお風呂は入れるね。」

まさかの妹の爆弾発言により、グレイの親＆カテナから変な誤解を受けたのは、言うまでも無く。　今後のグレイの対応についてなにやら楽しそうお話するのだった。

「俺は、レレナが喜んでくれるなら・・・嬉しいよ。」

涙を堪えながら、優しく丁寧に、レレナの頭をなでた。　傍から見れば、まさに実の姉妹のように見えた。　当の本人の気も知らずに。

「ところで、出発はいつにするのか決まったのかね？」

「ああ。　予定は、もっと早く出発する予定だったからな。　父さん達の顔も見れたし、明日には、行ってくるよ。」
「お兄ちゃん。　帰ってくる時は、お土産よろしくね。　楽しみに待ってるから。」

妹は、お土産をおねだりして、満足した様子。やれやれと想いながら、グレイは、出発の準備をするのであった。　その日の夜は、一段と晴れていた。　雪は降らず。　星達は、輝き。　澄んだ空気。
これから、起こる事に不安を覚える自分とは、裏腹にそれがまた、美しかった。

そんな光景を眺め。　最後にグレイは、持ち物を確認するのであった。　持ち物は、長刀・本・衣類（事前に母親が準備した服多数。）　準備が終わり。　ベットに横になり。　やわらかいベットを味わいながら、寝たのであった。

翌朝、雪山とあって木の陰などは、青く輝き。　美しく迎えてくれた。　吸血鬼は、暑さ寒さは、全く影響なく。　両親たちが、暑苦しいより涼しい方が見た目も好きみたいで、此処に館を築いたそうだ。　尤も、やたらと人間やその他の化け物にも襲われることの少ない静かな場所を選んだのが、大まかな理由であった。

グレイの服装は、両親達にもらったカテナ同様シスターの服をもらった。　何でも同じシスター服なら怪しまれないで、澄むから母親が昨日夜なべして４着程作ったのであった。　昨日用意した、妹の服は、黒のワンピースで、レース・フリルを基調としたのしか無く。　それを3着ほどもらったのであった。　しかしそれだけでは、女は、足りないとの事で、急ぎ作成したそうだ。
カテナのシスター不服とは、違い。　袖、スカートの部分は短く。
背中に羽が出せるように開いている使用だ。　昨日荷物を準備する前に、色々母親から身体の隅々まで、調べられたのであった。

ちなみに、グレイの羽はカラスの様な漆黒で羽毛状の羽である。
使いたい時は、出し。　使わない時は、しまえる便利な者だ。
しかし、そうでもしないと、寝る時に不便であるので色々と助かっ

てる。

だってあれじゃない。　ベットが羽だらけになるのは、勘弁。

朝食を食べ終え。　出発の時間がやって来た。　両親二人に、妹が寂しそうにこちらを見ているのであった。　それもそうだ、妹は、まだ２０歳。　俺は、１７８歳。　常に兄のそばにいた妹にとっては、割と深刻な問題だった。　グレイ本人は、決して自ら外へ出ることは、無く。　常に家で、本を読んですごしていたのであった。

だから兄に相手をして貰ってた今迄の生活は違うのだ。　そんなグレイが、この館から、旅に出るのは、今まで無く。二十歳の妹。

レレナにとって寂しい心情だった。

「いってらっしゃい。　絶対お土産忘れ無いで帰って来てね。何かあったら時々連絡するね。　だから、お兄ちゃんから連絡してね。　約束だよ。」

「ああ。　分かってる。　お前もお母さんと父さんに心配懸けるなよ。　それに暫く俺の血は、吸えないだろ。　飲みな。」

レレナに向かって白い細腕を差し出した、グレイ。　レレナは、嬉しそうにその腕を掴み、動脈の太い部分に口をつけ。　血を吸い出した。　その笑顔は、年相応に美しかった。

「えへへ。　やっぱりお兄ちゃんの味だ。　これは、変わらないね。　これからは、寂しいけど、カテナさんと契約したみたいだし。お兄ちゃん自身は、自分の身体を元に戻す為に行くんだもんね。がんばってね。　お兄ちゃん。」

「お前も元気でな。　それじゃ～父さんお母さん行ってきます。」

「「行ってらっしゃい。」　元に戻れなくても、いつでも戻って

きな。　父さんは、お前が娘で構わないからな。　むしろ娘がいいかも。」

「ちょっと貴方！　何考えてるの。　今のグレイの姿に変な気でもしたのかしら（怒）　ふん！」

「やっ・・それは、お前の若い頃に似ていてだな。　いろいろと想う事があるんだよ。　私は、お前だの夫だから。　そんな顔するな（涙）」

実は、グレイの姿は、今の母親と大して変わらないのだ。　少し今は、母親のほうが大人びているだけである。　ちなみに妹とは、鏡で写したように同じであった。　ただし黒髪なだけ。　父親譲りの黒髪が遺伝したのである。

「じゃあ～行ってきます。　俺からも何かあったら連絡するか。」

息子が出発したのに、いまだに口論をしている夫婦であった。ただ一人。　兄の旅立ちを心配してたのは、レレナだけであった。

空腹は、最大の敵。　これ生き物全ての共通。

久しく外に出歩いては、いなかったサングレイス。　始めは、心地良い気分で、自然を満喫していた。

澄んだ空気。　純白の雪。　緑が際立つ森林。　大きさから遠い時代のなごりを感じさせてくれた。

「景色が綺麗だな。　今迄、外に出ることが殆ど無いから、こんな気持ちは、久しぶりだ。」

「そうだったの？　最初の見た目は、活発そうだったけど。」

「それは、父親があんまりダラダラしている、俺にいい加減キレて、稽古を付け始めたからだろ。」

「へぇ～　稽古って、今あんたが肩に担いでる長い棒みたいな剣の稽古？」

「ああ。　ちなみにこれは、剣じゃ無い。　刀だ。　東方（ひがしかた）にある武器だそうだ。　父さん達が若い頃、新婚旅行で行った国にある得物だとよ。」

「ちょっ！ちょっと？　何で私が来た時にそれを使わなかった訳？　あんた！私と戦ってる時、素手じゃない。　私をバカにしてる？」

「正直あそこまで、戦えると思ってもみなかったものでね。　しかも負けるとは・・・・」

サングレイスは、素手だけで、カテナと戦い。　何とかＣＨＡＩＮ　ＪＵＤＧＭＥＮＴで勝てたと言う。　もしも、その刀という物で、戦っていたのなら、結果は、判らなかった。

勝負。　試合。　戦いなどは、一瞬の迷いが命取りになるのは、よくあること。　むしろ相手がカテナだから一命を取り留められたのだ。　もしも、殺し目的でそのような失態だったら命は、なかったであろう。　そして、その事にシルバー家は、全員カテナに感謝をしていたのであった。

「ところで、目的地の場所に近づいているのか？　幾度も幾度も雪だらけだぞ。　いい加減飽きたのだが。」

「そんなこと言ったて、今日出てすぐに見つかる訳は、無いのよ。本の世界な訳じゃ無いのだから旨い話があるかっての！　そんな小っちゃい心じゃ大きく慣れないからね！」

「別に俺は、大きくなりたくもないのだが・・・　まあ・・すまんな。　気が使えなくて。」

「ふん！　分かればいいの。　分かれば！　あんたは、私について来ればいいの。　おわかり！」

「・・・・・」

唯我独尊の絵に描いたような態度で、少々戸惑いの色を隠せないでいるサングレイス。　身内以外にこんな経験がなかったので、慣れてないが、どこか嬉しさも感じるのだった。

二日目。　雪。

三日目。　雪。

七日目。　雪時々吹雪。

一ヶ月。　雪時々晴れ。　または、吹雪。

そんな、旅路にそろそろ食料が底をつき始めたカテナ。　想像異常に厳しい旅に限界を感じ始めたサングレイス。　そろそろ限界に来たのであった。

「カテナ・・・　いったい何時付く予定だ？　そろそろ見つかっても良いじゃないか。」

「いや～　全然見つからないね。　ダウジングでは、こっちであってる筈なんだけど・・・」

「大丈夫なのか？　そのダウジング・・・」

「当り前よ。　この力のお蔭で、グレイを見つけたのだから・・・間違いないわ！」

「でも、ココ一週間ぐらい。　山を登り下り。　崖をこえ。　谷をこえ。　いろいろな道を来たのだが、一向に目的地にたどり付けるか心配なのだが。」

「大丈夫だから。　ＣＨＡＩＮ　ＪＵＤＧＭＥＮＴは、ちゃんと方向を示してるのだから。　グレイは、心配しないで、私に付いてきなさい。」

不安が無いと言えば嘘になるが、グレイ本人は、主人の言うことに逆らえる筈もなく。　輸血パックの残量を考えながら歩くしかないのであった。

三ヶ月目突入した辺りから、異変が起きたのであった。　なんとグレイが寒がりだしたのだ。　始めの頃は、薄着のシスター服でも平気だったのに、今は、カテナの黒いトレンチコート。　背中には、十字架が描かれているのを貸してもらってる状況だ。　それでも、やはり寒いのか顔色が悪くなり始めたのであった。

「ちょっと大丈夫？」

「大丈夫だ。　ちょっと疲れただけだから・・・　二三日したら、すぐ元気になるから。」

「本と大丈夫？　寒かったら、言いなさい。　服なら他にも有るから・・・それに、疲れたなら、焚火でもして、どこかで休めるわ。」

「そうだな・・・　その時は、言うから・・大丈夫だよ。」

不安にさせない為にグレイは、言ったが肉体は、もう既に限界を超えていたのだった。　それもその筈、グレイは、一ヶ月前から、血を一滴も飲んでないのであった。　そして、吸血鬼の能力も使えなくなり始め、寒さも感じ始めたのだ。　こんな状況は、一度も無く。　グレイ本人は、知らないでいたのだ。

その日の夜は、何時も後退で、見張るが顔色が悪いと言う事で、さっさと寝かせたのであった。

これは、結構やばいかもしれないわ。　ただでさえ、白い顔なのに、白さがましてるわ。　何が原因かしら・・・・　全く検討もつかないし。　どうしよう・・・

苛立ちと不安の入り混じった眼差しで、グレイを見つめ。その日の夜は、終わった。

次の日、グレイの荷物を代わりに持ち（刀は断固拒否をした。）雪山をひたすら歩き続ける二人だった。　荷物といっても、見た目は、ただの茶色い革製の肩掛けバックだ。　中身は、カテナ同様圧縮できる使用だ。　しかし、今は、それでも動きを鈍らせるので、代わりにカテナが持ったのであった。

「この辺視界が悪いから注意しなさい。」

「そうだな・・・　この吹雪じゃ～お前から逸れたら迷子どころか、今の場所すら分からねえし。　気をつけて行くわあああぁぁぁぁっぁあああぁぁぁ」

「え！　ってグレイ！　グレイィィィィー」

足場が抜けて、下に落ちたのであった。　グレイの姿は、どこにも無く。　ただ大きな穴が底に空いていたのだった。

「グレイが落ちちゃった。　どうしよう。　早く助けなきゃ。」

突然おきた出来事に混乱し、慌てるカテナであった。

アンダーグラウンド

吹雪の中、竜人族の神殿を探してた途中で、大きな穴に落ちてしまったグレイ。　カテナと逸れてしまったグレイは、何処から来たのか分からないような状況にいたのだ。

「いてて。　此処は、何処だ？　洞窟かな。」

グレイが落ちた場所は、誰かが意図的に作られたと思われる、洞窟であった。　周りを見渡すと、岩が崩れたのか、一つは塞がれていた。　もう片方は、何とか無事なようだ。

「カテナと逸れたな。　周りを見ても道は、一つしかないから、恐らくカテナの所には、戻れないだろし・・・　このままいてもしょうがないから先に進むか。　刀は、運よく失くさなかったしよかったな。」

そんなに大切にする、グレイの刀は、レレナが１５歳の頃、家族旅行でのお土産で買った物。　グレイの誕生日の日に渡された、プレゼント。　父親のお下がりで、壊したらよく怒られると事が多かったグレイ。　気兼ねなく使える、練習刀として、送られた妹からのプレゼント。　しかし、グレイにとって、最早かけがえのないもの。　グレイの身長合わされた、長刀。　グレイは、この刀を大切に使っているのであった。

洞窟のは、一本道で歩きやすかった。　何処に辿り着くのか、考えてたら光が見えてきた。　光が見えたグレイは、走って光の先へ

向かった。　そこに見えたのは、町だった。

「何だここは？　町じゃないか。」

光の先は、シルバー家の近くの町よりも大きく、人の声が絶えない賑やかな町。　上には、太陽のように輝く光があり。　草や木、川も流れていたのだ。　呆然とその光景を見ていたら、巡回中の騎士に見つかってしまった。

「怪しいやつかいる！　その女を捕まえろ。」

一人の騎士が、仲間を呼び、地面に押さえつけて、グレイを取り押さえた。

「なんなんだ！　あんた等は。　いきなりこんな事するなんて。」

「貴様吸血鬼だな。　残念だがこの場所を知られたからには、生かしては、介さない。」

「そんな嘘だろ。　誰にも言わないから、離してくれ。」

「我らの国の情報を漏らさない為、死んでもらう。」

「吸血鬼を牢に運べ。　そいつの持ち物は、司祭殿に渡しに行く。」

口を挿む間も無く、グレイは、大きい石造りの建物に連れられ、地下牢にいれられた。　しかも入れる途中でグレイの服は、破られ。刀は、持ってかれ。　両手、両足を縛られ。　目隠しをされた。

最早、喋る事しか今は、できない状況なのだった。

「出せおら！　外さないと殺すぞ。」

あまりの出来事に暴言を浴びせるグレイ。　そんなグレイの様子を先ほどの騎士と一緒に司祭が見に来た。

「司祭殿。　こやつが先ほど報告しました、吸血鬼の女でございます。」

「ほーぉ　これが吸血鬼か。　先ほどから女らしからぬ暴言。酷いな。　今は、食料の調達をしに国外へ出てるからな、これの処刑は、戻られた後、行うこととする。　いいな。」

「了解しました。　あと司祭殿、こちらが吸血鬼の持ち物になります。　恐らく武器だと思われます。　いかがなさいますか？」

「見たことも無い武器だな。　こんな細い剣で使えるのか？　恐らく安物だろ。　ゴミにして、捨ててしまいなさい。」

「了解しました。」

グレイは、今の会話を聞いて怒りが頂点に達した。　大切にしていた物をゴミ呼ばわり。　確実に殺すと決まった瞬間だった。

「司祭、貴様の名前はなんだ。」

「私は、ホワイトドラゴン様に仕える、アルバス神殿の司祭。スケー・ベルガだ。　死に行く前に覚えおけ。」

汚らわしい物でも見るかのように司祭達は、立ち去った。　グレイは、その声を脳みそに刻む為に黙ったまま、牢屋に入るのであった。

時は戻り、グレイの落ちた穴の前にいるカテナ。　落ちたグレイの後を追う為、魔力で鎖を操って、少し離れた木に巻きつけていた。

「よし。　それじゃ～降りますか。」

カテナの鎖は、自由自在に長さを変えられ自由自在である。　そして、素手のグレイが攻撃しても、耐えられる強度を誇る物。　寸やそっとで壊れ無い用に出来てる。

「すごく深いわねぇ。　生きてるかしら。」

グレイがたまたま落ちた穴を降りながら不安な面持ちで、降りるカテナ。　まだ、グレイが酷い事になってるとも知らずに。

「グレイも調子悪いし。　大丈夫かな～　もしかして、生き埋め状態になってたりしてぇ。」

穴の下が見えてきたカテナ。　上からだいぶ降りたのか、辺りが暗くなり始めた。　カテナは、そろそろ見えなくなるので魔法を使い明るくした。

「やっと下まで付いた。　全部埋もれてるし。　地面でも掘るか。

それだと、グレイの居場所をダウジングで探して・・・・こっちか。」

ダウジングの示した先を見つめカテナは、鎖に魔力を込め、示した方向に鎖を突き刺した。　刺さった地面は、大人の人間が入れるサイズの穴が開き、グレイを助ける為、進むのだった。

下に向かうように暫く掘り続けたら、急に光が差し始めた。　穴に顔を近づけると草木が整えられたとても綺麗な場所が見えた。

暫く観察し、地面との距離を考えるカテナ。　高い位置からどう降りるか考え。

「決めた。」

降り方を決めたのか、穴から飛び降りる。　暫く落下した後、天井の壁に鎖を突き刺しゆっくり下りた。

地面に着地した後、周りを警戒し、人が来るのが分かり、物陰に隠れたカテナ。　直ぐに騎士たちが何人か、現れたのだ。

「上に穴が開いてるぞ。」

「あの吸血鬼の女の仲間かもしれないな。」

「まだ近くにいる筈だ。　見つけたら、あの吸血鬼と一緒に牢にぶち込むぞ。」

「「「ハ！」」」

なにやら雲行きの怪しい話をする騎士たちを聞き。　その場から速やかに撤収するカテナ。

「グレイ捉まったのね。　それでも助ける前にまずは、情報収集かしら。」

密かに怒り覚えるカテナ。　速く助けたい気持ちを押し殺し、冷静に判断をするのであった。

牢にいるグレイを助ける為、情報収集するカテナ。　人に見つからないよう町の中を移動していた。

「なんとかして助けたいけど。　この服は、目立つわね。」

シスター服を着ているカテナは、町の竜人族の人達の服装と余りにも違い目立つ服装だ。　何とか目立たないように行動をしたいのでどこかで服を調達しようと考えた。

「お！　丁度いい所であるじゃない。」

カテナが見つけたのは、一人沢山の荷物をのせて荷車押す騎士の姿だ。　カテナの目には、日常できた、生ゴミや割れた壷等を運んでいた。

暫く隠れながら、後を付いて行き、大きな穴が空いた所に荷車の荷物を捨てようとしていた。　作業に集中していた騎士をカテナは、背後から騎士をゴミの穴に落とした。　勢いよく鎖を騎士の頭に投げつけ。

「パン！」

すがすがしい音を奏でてくれたのだ。　その後カテナは、ゴミ捨て場に降りて、騎士を探した。　見つけた騎士は、気絶していた。

鎧を剥がして鎖で縛り、騎士を起こし始めた。

「おきろ。　おきろたっら　おーきーろ。」

声を掛けながら顔を叩くカテナ。　何度やってると騎士は、目を覚ました。

「う・・うえ。　な・何だ？　何で私は縛られてる。　いったい誰が？」

「やっと起きてくれた。　ふふふ～　今から私に協力して欲しいの。」

「ふ・ふざけるな！。　なぜ、私がお前に協力しなければならないのだ。」

「別に無理して協力しなくても構わないけどさあ？　他にも人は沢山いるし。　ただ・・・ねえ？　死より辛いことになるよ。」

「はっ　はったりだ。　お前みたいな女が何ができる！」

「そう・・・それはそれは残念だわ。　そんなに知りたいのならやるしかないわね。」

カテナは、無表情な顔をしながら、呪文を唱えた。

「起源は闇　隣人は太陽　歴史が刻まれし扉を開け　我に鍵の力を賜われよ。」

呪文が終えると、左手から黒い影が現れ、騎士の近くに寄り、見下ろした後、左手を騎士に刺した。

殺されると思い、騎士が目を瞑った。　しかし一向に痛みがこないので、恐る恐る目を開けると。　赤い紐を一本持っていた。　騎士が何をされたのか分からないからカテナに聞いた。

「いったいなにを俺にした。　さっき黒い左手に殴られたと思ったが？」

騎士の言葉を聞いたカテナは、紐を擦るように触りながら先ほどより楽しそうに喋りだした。

「貴方の名前は、ザボス・ハドソン。　1月3日生まれ。　随分忙しい時期に生まれたのね貴方。　騎士になったのは、１０歳の頃ね。　平民なのに戦闘が得意お陰か、騎士まで昇りつめた。　今は、多少雑用が多い行けどそこらの平民よりは、安定した収入。　幼馴染のシータちゃんと結婚して、子宝に恵まれ。　長女のアンナちゃんが生まれた。　シータちゃんと長女のアンナちゃんは、結構可愛いじゃない。　今は、北側の家に住んで、幸せな家庭を築いているか・・・」

淡々と喋られた言葉に驚愕の色を表すザボス。　言葉を聴くたびに、身体に変な力が入っているようだ。

「今は、家で帰りを待つ妻と娘。　運悪く炎が空から降ってくるかも知れないかもね♪　アハハハハ。　やだ☆怖い～」

その言葉を聴いた瞬間、絶えられなくなり、泣きながら懇願した。

「頼む。　家族には、なにもしないでくれ、お願いだ。」

「どうしたの急に泣き出して？　あっ忘れてた。　今、私は貴方に協力をお願いしていたんだ。　協力していただけます。　ザボスさん♪」

「協力させてください。　お願いします。」

頭を擦りながら協力をするといったザボス。　落ち着くまで、時間が掛かり暫くゴミ捨て場に二人はいたのだった。　暫く落ち着かせる為カテナは、ゴミ眺めていた。　色々捨ててあると思いながら目を動かしていると、見覚えのある物を発見した。　それは、グレイの長刀だった。

「あいつ・・・今これなくて、悲しんでいるだろうな・・・　私が持つよといっても、嫌がってたし、速く届けてあげなくちゃね。」

改めて、助けだす決意をするカテナ。　時間が経ち落ち着いたザボスに指示をだした。

「まず最初に吸血鬼の女の子を助け出すから。　牢屋にいくわよ。それから、一般的な服を持ってきて頂戴。　それじゃお願い。」

「分かった。　直ぐに持ってくる。」

「あっ　そうそう5分して服を持ってこれなかったら、私は此処にいないからそのつもりでお願いね」

「ふん。　1分で戻ってくる。　心配するな。」

その言葉に偽りなく。　肩で息した状態で戻って来たサボス。

その服に着替え二人は、直ぐに牢屋に向かった。

紅蓮

暗く、異臭の漂う、冷たい牢屋。　グレイが捕まってから数刻か過ぎようとした。　目を塞がれ、両手両足を縛られたグレイの状況は、酷いものだった。　挙句の果てに、服も破かれてしまい、現在は、裸でいた。　此処に来る前から血を摂取せずに体力無い状態でこの有様。　グレイの体調の悪さが、悪化していくのである。

「へっくしゅん！　あ～調子悪。　このままじゃオカシクなるな・・・・」

このまま待っててても悪戯に時間が過ぎてしまう為、脱出方法を考えるグレイ。　何かないかなと思いながら牢屋の異臭に眉間をよせて、絶えるのである。

暫くし、牢屋の開く音がした。

「中々良い女じゃないか。　これなら、楽しめそうだな。」

下卑た声が、牢屋に広がった。　恐らく看守か、騎士のどれかと思いグレイは、威圧しながら声を出した。

「何しに来た。　此処から出してくれるのか？　それならお前の命は、助けてやる。　半殺しだけどな。」

そんな言葉を聞いた来訪者は、グレイの目隠しを外し、だらしなく涎をたらしながらこう告げた。

「今からお前で遊ぶんだ。　楽しませてくれよ。」

目の前にいた男は、騎士だった。　鎧を着ていないが声分かった。
来た理由は、恐らく今の身体（女）目当てだろと結論付けたグレイ。　呆れ顔を見せながら騎士に視線を向けてると牢屋中に置いてあるバケツの方に騎士は、向かった。

バケツは、普段囚人の身体の汚れを落とすか排泄用の為、用意されたものである。

騎士は、バケツを掴み、グレイに向かって牢屋の中にあるバケツを手に取り、グレイに水をかけ始めた。

グレイに掛かるや否や、蒸発するような音をたてた。　グレイは、激痛に顔を歪めながら、悲鳴を上げた。　身体は、思うように動けない為、痛みを耐えることが出来ないでいるのだ。　そんな悲鳴を聞いた騎士の反応は、思った以上の反応だったのか何度も水を掛け続け悲鳴を聞く度に下卑た笑いをするのである。

グレイの牢屋にある水を使い切った頃、グレイからは、悲鳴もない状態であった。

身体は、赤く焼け爛れた後があり、傷口から酷い異臭を放った。
騎士は、水を掛け終り悲鳴もなくなったのでご満悦の様子。　後は、遣るだけであった。　騎士は、グレイの今までの悲鳴が相当良かったのか最早盛りの猿状態だ。

「泣き叫びもしなくなったし・・・・そろそろいただきますか♪」

グレイの両手両足を縛ってた拘束具を外し、小さな身体抱きかかえた時、虚ろな顔をしたグレイは、騎士の首を大鎌で飛ばした。

辺り一面が血に染まり、首から出てる血を飲み始めた。　グレイの身体は、紅の色に染まり、先ほど怪我をした身体は、再生を始めた。

血が固まり、食べ飽きたのか？　立ち上がりながら大鎌取り出し鉄柵を切り倒し、虚ろな眼でどこかへ歩き始めた。

捕まった時に外れ無くそのまま右手の薬指にはめていた指輪。同じ右手の甲に契約時のルーン文字がそこには、消えていたのである。

その頃カテナは、神殿地下の牢に捕まってるグレイを助ける為、ザボスと一緒に向かっていた。

「ねぇ。　あとどれぐらいで着くの？」

「あと１０分ぐらいだろ。　そんなに慌ててどうした。」

急に慌てだしたカテナ。　先ほどから指輪で感知していた生命力が無くなってしまったからである。　もしかして処刑が行われたと思い、ザボスに捕まってる吸血鬼との関係から説明をした。

「そんな事がある筈ないがな。　現在食料調達部隊が此処から離れているせいで、人手不足だ。　それに処刑ほどの在任は滅多に出ないから、大々的に行うと上官から私は、聞いたのだが・・・」

「それじゃ生命力の反応は、どうなってるのよ？　全く無いなん

て可笑しいわよ！」

「しかし、さっきの話を聞いた限りでは、手の甲の印が消えないのが変だろ。」

今現在、カテナのルーン文字は消えては、いないのである。　消えてないので生きてるとは思っていても、生命力を感じないので、危険な状態だと思ってしまうのであった。

「だから急いでるじゃない。　速く行かないとグレイが死んじゃうよ。」

ザボスに言ってもしかたが無いが言わずには、居られないカテナである。　我慢の限界が近づいて来た辺りで、神殿の前まで来たのであった。

「此処がホワイトドラゴンを祀る、アルバス神殿だ。　主面入り口は、警備が居るので、裏から行くぞ。」

ザボスが裏口に行こうとしていた時、神殿の正面から凄まじい血の匂いが漂ってきた。　その匂いに気づいた二人は、正面みる。中から慌てて逃げ出す騎士たちいたのである。

「いったい何だあの化物は？」

「そんなの俺が知るか！　速く逃げないと死ぬぞマジで。」

「でもあそこには、姫巫女さが祭壇でお祈り中だぞ！」

「なら、お前が助けに行け。　俺は此処から逃げる。」

騒ぎながら逃げ出す騎士達。　警備の職務を放棄して逃げ出す姿は、情けないものであった。　逃げ出す騎士たちが、通り過ぎて辺りでザボスは、喋りだした。

「かなり大変な事になっているな。　カテナは、中に入るのか？」

「私が行かないで、誰がグレイを迎えにいくの。」

「確かに・・・・」

含み笑いをしながらザボスは、腰に下げていた、バルディッシュを掴みこう告げた。

「カテナ！　我ら誇り高き騎士を見くびるなよ。　先ほど逃げ出したクズども一緒にするな。　姫巫女様に危険が所持たら、我らは迷わず剣を取りその敵を討ち滅ぼす物になるぞ。」

そういい捨てて、神殿に向かったザボス。　以外な一面を見たカテナは、やはり思う。　初めて会った時にサボスの歴史を覗いていたが、それだけでその人を理解するのは、無理だということを。そして、気持ちを切り替え、ザボスの後を追うのであった。

神殿の中は、酷い匂いだった。　辺り一面が血の跡があり、首を飛ばされた者が沢山いた。　険しい表情をしながら、後ろに付いてくるカテナにザボスは、言った。

「恐らく、此処の道を真直ぐ進んだ所の祭壇に姫巫女様がいらっしゃる。　急いでいくぞ！」

険しい表情で言ったサボス。　仲間が無残に首を飛ばされた光景見て、怒っているようだ。　その中には、親しい者達も居たのであろう。　急ぎ祭壇に向かう二人。　二人が祭壇で見た光景は、最後の騎士が切り殺されたところで付いたのだ。

祭壇の近くに、赤く血塗られた服を着た少女が一人（姫巫女）。先ほど切り飛ばした騎士の首元を貪る用に血を吸うグレイが居たのだ。

その光景に二人は、驚愕していた。　サボスは、上官から今回捕まえた、吸血鬼の話を聞いていたのだ。　その上官が言うには、「小さい女だが、色白の長い銀髪で綺麗だった。」　上官は、悲しそうに「まだ若いのになんで此処に・・・来なければ死なずに澄んだ命を・・・。」　しかし、目の前に居る少女は、銀髪の長い髪だが所々紅に染まり、白い身体も血で染まっていた。

姫巫女は、悲しい顔をしながら、血塗られたグレイに話掛けた。

「どうして、貴女は泣いているのですか？」

姫巫女の言葉に二人は、驚いた。　背中しか見えていなっかたせいか、グレイが泣いているのに気がつかないでいた。

涙の粒をたらしているが、表情の虚ろなグレイは、大鎌をまた何処からか出し、姫巫女に近づくき、切り掛かった。

先に反応したのは、カテナ。　鎖で捕らえようとしたが、大鎌に弾かれた。　鎖を放たれた方に向き直り、カテナを見た。　カテナに振り向いた顔。それは、出会った頃のグレイとは、まるで別人み

たいだった。

「暫く見ない間に血なまぐさくなったわねぇ。　どうしたのかしら？」

「・・・・」

「無視ですか？　へぇ～　良い度胸じゃない。　面白すぎて、私の頭が可笑しくなったじゃない。　そうね♪　決めた★　あんたの頭を冷やしてあげる。」

余りに変わり過ぎてしまい、怒るカテナ。　何より許せないのが、契約の印が消えていたのである。　原因が分からない今、取り合えず戦うのであった。

「あんたに審判をくだす！」

そんなカテナ、グレイを見ていた立会い者二人（姫巫女・サボス）。

吸血鬼とＣＨＡＩＮ　ＪＵＤＧＭＥＮＴ継承者の死闘が始まろうとしていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7731y/

CHAIN　JUDGMENT

2011年11月28日01時45分発行